

論文要旨

| | | | | | |
|--|--------|------|----------|----|-------|
| 所属ゼミ | 小林 研究会 | 学籍番号 | 80730195 | 氏名 | 鶴浦 英也 |
| (論文題名) | | | | | |
| 多角化企業のマネジメント —金融コングロマリットを中心に— | | | | | |
| (内容の要旨) | | | | | |
| <p>サブプライム・ショックを契機とする金融危機により、世界各国の金融機関の収益力、体力に翳りが見られる。一方、伝統的な商業銀行や証券、保険の業務では、すでに厳しい利鞘競争や、手数料のダンピングが進んでおり、金融機関の新たな差別化手段の獲得は待ったなしの状況にある。一方で、金融機関の現場では、多岐にわたる業務を同時遂行することの混乱や疲弊も見られるのも事実である。本論文では、ユニバーサル・バンク化やワンストップ・ショッピング戦略により、規模の経済および範囲の経済を実現ことで生き残りを目指す、金融コングロマリットの競争戦略、特に多角化戦略に焦点を絞った。その上で、様々な多角化戦略に関する先行研究を統合し、金融コングロマリット経営の指針となるべきフレームワークの策定を目指した。</p> <p>分析に際しては、先行研究を土台に、多角化企業のマネジメントを行うための戦略的アプローチを、戦略を計画的もしくは漸進的に進めるのか、そして、戦略策定の担い手がトップなのかオペレーションレベルなのかを軸に4つに分類。これらを市場支配力、経験と改善力、ポートフォリオ構築力、ドミナント・ロジックと名づけた。そして、多角化戦略による経営成果は、成長性もしくは効率性の向上で表されるとし、4つの戦略的アプローチとの関係を、国際的金融コングロマリット21社の定量分析、および特徴的な日米欧の金融コングロマリットに関する事例研究により実証した。</p> <p>定量分析および事例研究から、市場支配力は、特定の市場や顧客に対するシェアを高めることで成長性および効率性の向上に、経験と改善力は、人材交流や評価・インセンティブのあり方を模索していくことで効率性の向上に、ポートフォリオ構築力は新たな成長機会の確保やグループ収益力の安定化、事業入替に関する基準の明確化を行うことで成長性および効率性の向上に、そして、ドミナント・ロジックのレパートリーを多彩にすることが成長性の向上に、それぞれ寄与することが分かった。そして、金融コングロマリット化は、今後の金融機関の生き残りをかけた有効な競争戦略の一つであり、今回示した4つの戦略的アプローチに基づいたマネジメントが行われることが重要であることが分かった。</p> <p>また、事例研究から、一口に金融コングロマリットといっても、コア・コンピタンスやこれまでの経緯により、資産レバレッジ型と資本レバレッジ型の2つのタイプが存在することが示唆された。そこでは、相対立する施策も存在しており、優先順位付けを明確にすることが重要となってくる。本論文の最後では、2つのタイプが成立するための条件や危機に陥るケースについて記し、タイプ別の戦略的アプローチに関する提言を示している。</p> | | | | | |